
前置詞 *wegen* の格支配の変遷

Metadata, citation and similar pa

stitution Repository

佐藤 恵

1. 〈*wegen*+2 格〉^りと 〈*wegen*+3 格〉の競合

言語は、等質的に見えながらも、実際には非等質的 (heterogeneous) で可変的 (variable) なものである。Weinreich/ Labov/ Herzog (1968) の言語変化理論によれば、複数の異形 (variant) が並存する非等質な状態において、話し手 (書き手) たちは特定の規則性に従って異形を選択しているので、その非等質な状態は「整然さを保っている」(orderly) (Weinreich/ Labov/ Herzog 1968: 187f、高田 2009a: 35、高田 2009b: 25)。異形には主要形 (標準形) と副次形 (非標準形) があり、ある異形は廃れ、また新しい異形が加わるという具合に、構成メンバーは時代とともに変わっていく。副次形とされている異形も、5 年後、10 年後、50 年後には主要形になっている可能性がある。異形をモザイクの小片に例えるならば、いくつもの小片が織りなすモザイク模様は、時代とともに変化する。言語変化とは、競合し合う異形の並存状態の姿、つまりモザイク模様に変化することである。このように複数の異形が存在するからこそ、次の時代の言語に変化が生じうるのだというのが、Weinreich/ Labov/ Herzog (1968) の言語変化理論の主旨である。

さて、本論文は、前置詞 *wegen* の格支配に関わる異形について考察するものである。ジャーナリスト Bastian Sick による『3 格は 2 格の死を意味するードイツ語の迷路を通り抜けるための案内書 (*Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod. Ein Wegweiser durch den Irrgarten der deutschen Sprache*)』は、2004 年にドイツでベストセラーとなった。このなかで Sick は、前置詞 *wegen* を 2 格ではなく 3 格と結ぶ用法

* 本論文は、日本独文学会 2014 年春季研究発表会 (2014 年 5 月 24 日、麗澤大学) における発表内容に加筆修正を施したものである。本論文はまた、日本学術振興会特別研究員 DC1 (課題番号 26-10892) としての助成による研究成果を一部含むものである。ここに記し、謝意を表す。

1) 本論文では、それぞれの異形を示す際に 〈 〉 で囲んで表示することとする。

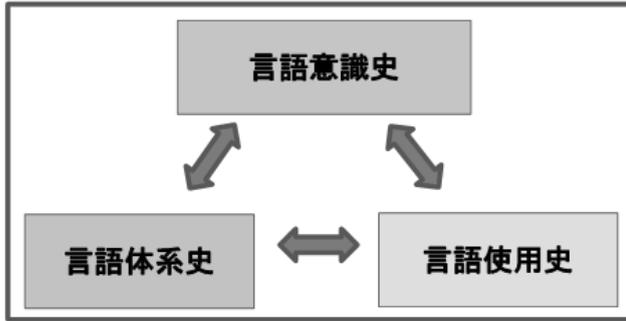
は「ますます頻繁に耳にされる」(Sick 2004: 16) 現象であり、「標準語を低める」(ebd.: 15) ものであると主張している。この Sick の発言は、wegen は「最近では与格(3格)を支配することが増えてきている」というヘンツェル/ヴァイト(1994: 262)の記述と一致し、また wegen の3格支配は「話しことばにおいて許容される」という Duden-Grammatik (2009: 612) の記述と一致している。wegen の場合の2格と3格の選択を「文体の問題」(Eisenberg 1994: 260) と捉える見方とは異なり、Sick (2004) は、「3格は2格の死」という題名が示すように、2格を「絶滅種」(ebd.: 16) のように扱い、3格を2格にとっての脅威として位置づけている点が印象的である。このような言語批判的スタンスが、広く読者に受けたのであろう。このように現代ドイツ語では、主要形としての〈wegen+2格〉と副次形としての〈wegen+3格〉が並存している。そもそも〈wegen+3格〉という異形は現代ドイツ語にのみ見られる現象なのであろうか？また、〈wegen+3格〉は、いつどのように出現し、増減したのであろうか？

この問いに答えるべく、本論文は前置詞 wegen の格支配に関わる言語変化を追う。その際、この言語変化を、書き手(話し手)の「言語意識」(Sprachbewusstsein)が歴史的にどのように変化していったのかという点との関連で捉える。Milroy (1992) の言うように、「改新を行うのは話し手であって、言語自体が改新するわけではない」(Milroy 1992: 169)。言語変化とは、書き手(話し手)が複数個の異形のなかから選択する仕方が変化することである。そして、この選択の仕方を制御するのが、話し手(書き手)が各異形について抱いている評価、言語意識である。「個人または(具象的意味での)集団がもつメタ言語的知識の総体」(Scharloth 2005: 19)としての言語意識は、「社会集団もしくは言語共同体の言語使用のなか」に出現する新たな言語形式あるいは異形に関わり、またその評価に関わる」(Elspaß i. Dr.) ののである。Mattheier (1995: 14-16) の「社会語用論的言語史記述モデル」によれば、「言語意識史」は、体系に関わる言語内的な「言語体系史」と、社会的状況に応じて選択される異形と文体の変化に関わる「言語使用史」と関連づけて記述する必要がある。²⁾ 本論文においては、この Mattheier (1995) のモ

2) Mattheier (1995: 15) の「社会語用論的言語史記述モデル」における4つめの部門「言語接触史」については、本論文では扱わない。このモデルについては、高田 (2009b)、細川 (2009) も参照。

デルに依拠しながら、[図 1] のように、言語意識史を言語体系史と言語使用史の解明から再構成する。

[図 1] 本研究における言語意識史の再構成の方法



そこで、まず第 2 章、第 3 章では前置詞 *wegen* をめぐる言語体系と言語使用の歴史に関して考察する。さらにこれに加えて、第 4 章では、各歴史的段階における言語（異形）に関する明示的な発言、つまりメタ言語言説という観点からも、言語意識史を再構成する。すなわち、言語について明示的に評価を述べていると想定される文法書と辞書における言説を調査する。これらの発言から、「言語の多様性がどのように認識されていたのかに関する直接的な情報」（Nevalainen/Raumolin-Brunberg 2003: 6）を得ることが可能であり、メタ言語言説は、異形に対する評価・価値づけを知るうえで重要な直接的資料となる。このようにして、「言語体系」と「言語使用」から間接的に、そして「メタ言語言説」から直接的に、「言語意識」を再構成するというのが、本論文の眼目である。分析の対象とする時代は、ルターが登場した時期となる 1520 年から、ドイツ帝国誕生直前の 1870 年に至る 350 年間である。前置詞 *wegen* を例にして、このように言語意識に関わる通時的な調査・分析を行うことによって、言語変化全般のメカニズムの一端を垣間見ることができるであろう。

2. 1520～1870年における言語体系と言語使用の歴史

2.1. 先行研究

前置詞 *wegen* の歴史的由来について、先行研究においてはどのようなことが明らかになっているのだろうか。先行研究をまとめると、次のような時期に次の 5 つの異形がそれぞれ現れていることになる：

[表 1] 先行研究による前置詞 *wegen* の歴史的変遷

1250-1275	〈von+2 格+wegen〉	が初出
1369	〈2 格+wegen〉	が初出
15 世紀	〈von wegen+2 格〉	が増加
17 世紀	〈wegen+2 格〉	が出現
??	〈wegen+3 格〉	が初出

前置詞 *wegen* は、「中高ドイツ語の前置詞句 von X (2 格) *wegen* (「～の側 (傍ら) から)」における名詞 *wec* の複数 3 格形に由来する」(Szczepaniak 2009: 98)。この 〈von+2 格+wegen〉という前置詞句は、「官庁語を通して低地ドイツから高地ドイツ語に入ってきたと考えられる。von ... *wegen* の初出は 13 世紀の古文書に見られる、*„von unsers herren des bischoves wege urkundenbuch d. st. Straszburg 1, 367, 2 (1262) “*」(Grimm 1922: 3091)。Szczepaniak (2009: 100) によると、「15 世紀から」名詞の 2 格が後置される 〈von wegen+2 格〉が多くなるが、von 付きの異形はそもそも次第に使われなくなる。それに代わって「新高ドイツ語時代の経過のなかで」形成されたのが 〈von+2 格+wegen〉から von が取れた 〈2 格+wegen〉という異形であり、「初出は、1369 年である」(Trübner 1957: 68)。今日の主要形である、*wegen* が前置された 〈wegen+2 格〉は「17 世紀から現れ」、3 格と用いられる 〈wegen+3 格〉は「特に南ドイツで広まっており、民衆のことば (Volkssprache) にかなり頻繁に見られる」(Dal 2014: 64) とされている。

意味についてみると、前置詞句 〈von+2 格+wegen〉は 13 世紀当初においては「～の側から」、「～に関しては」という《由来》、《関わり》を表した。この前置詞句にまもなく《理由》を表す意味が加わり、「純粋に理由を表す von...*wegen* はすでに早いうちから、例えば 14、15 世紀の散文の中で広く使われていた」(Grimm 1922: 3096)。そして、「理由を表す *wegen* は 16 世紀にますます増加し、17 世紀に

は主流となった」(ebd.: 3092)。

以上のことから、筆者が先行研究を見た限りでは、先行研究は *wegen* の異形の出現時期に関して、次の2点で不十分な記述に終わっていることがわかる：

1. 〈*wegen*+2 格〉については、「17 世紀から現れた」という記述しかない。
2. 〈*wegen*+3 格〉については、いつ出現したのかに関する記述がない。

そこで、以下に概要を説明する「散文コーパス 1520-1870」を分析することで、各異形の競合関係を通時的に追っていきこう。

2.2. 異形の競合状態 (通時的概観)

バイエルン州立図書館をはじめとする図書館では、近現代の印刷物のデジタル書籍化が進められている。本論文では、これらのデジタル化された印刷書籍を利用して、1520~1870 年のドイツ語書籍計 140 冊を対象に、前置詞 *wegen* の歴史的発展について実証的調査を行った。その際分析対象とした書籍は、散文で書かれた(文学作品ではない)ものであり、宗教書、哲学書、歴史書、法学書、新聞などジャンルに偏りが出ないように配慮した。この 140 冊を以下では、「散文コーパス 1520-1870」と呼ぶことにする。「散文コーパス 1520-1870」は、10 年を一区切りとし、各 10 年間に 4 冊を選び出したものである(地域に偏りが出ないように、出版地がドイツ南部 [上部ドイツ語圏] のものを 2 冊、ドイツ中部北部 [上部ドイツ語圏以外] のものを 2 冊とした)。調査の対象とした語形は、2 格形と 3 格形との判別が容易な男性・中性単数名詞と結びついた *wegen* に限定した。その際、人称代名詞(例えば *wegen seiner*, *seinetwegen*, *wegen ihm*)、および指示代名詞(例えば *wegen dessen*, *wegen dem*) は分析の対象外とした。

さて、この「散文コーパス 1520-1870」を分析してみたところ、*wegen* に関して合計 3947 例が採取できた。*wegen* に関わる異形としては、先行研究では触れられていない異形(〈*von wegen*+3 格〉)も含めて、次の 8 種が確認できた。「散文コーパス 1520-1870」における初出例を添えておく：

[表 2] 「散文コーパス 1520-1870」における wegen の異形と初出の例（出現年代順）

wegen の異形	用例数	「散文コーパス 1520-1870」における初出の例
〈von+2 格+wegen〉	391	von des Beschawen wegen (Anonym 1528: 6) 「検査ゆえに」
〈von wegen+2 格〉	319	von wegen des heyligen Sacraments (Mensing/Fritzhaus 1527: Bl. C3 ^f) 「聖なる秘蹟ゆえに」
〈2 格+wegen〉	243	des ewigen worts wegen (Mosheim 1542: 39) 「不変の言葉ゆえに」
〈um+2 格+wegen〉	8	vmb rechts wegen (Veit 1546: 26) 「法ゆえに」
〈wegen+2 格〉	2.240	wegen des Euangelions (Laurentius/Fabricius 1576: 195) 「福音書ゆえに」
〈wegen+3 格〉	738	wegen dem zeugniß Dr. Peußers (Heiden 1598: Bl. B3V) 「Dr. Peußers の証言のために」
〈von wegen+3 格〉	4	von wegen dem Stiff (Hund 1598: 152) 「修道院のために」
〈wegen+4 格〉	4	wegen einen einzigen Apffel (Pacifcus 1719: 370) 「たったひとつのリンゴのために」
計	3.947	

「散文コーパス 1520-1870」における各異形の出現状況を示したものが、続く [表 3] である。10 年ごとの wegen の総用例数中に各異形の占めるパーセントを示している（小数点第二位以下は切り捨て）。カッコ内は用例の実数である。

[表3] 「散文コーパス 1520-1870」における wegen の出現状況 (全 3947 例)

散文コーパス 1520-1870									
	von + Gen. + wegen	von wegen + Gen.	Gen. + wegen	um + Gen. + wegen	wegen + Gen.	wegen + Dat.	von wegen + Dat.	wegen + Akk.	Σ
1520-1520	66.6% (2)	33.3% (1)	0	0	0	0	0	0	3
1530-1530	52.3% (11)	47.6% (10)	0	0	0	0	0	0	21
1540-1540	41.1% (7)	47.0% (8)	5.8% (1)	5.8% (1)	0	0	0	0	17
1550-1550	50% (8)	50% (8)	0	0	0	0	0	0	16
1560-1560	32.2% (29)	63.3% (57)	3.3% (3)	1.1% (1)	0	0	0	0	90
1570-1570	17.1% (6)	77.1% (27)	0	0	5.7% (2)	0	0	0	35
1580-1580	23.5% (21)	65.1% (59)	2.2% (2)	0	8.9% (8)	0	0	0	89
1590-1590	25.9% (34)	32.8% (43)	2.2% (3)	0	37.4% (49)	0.7% (1)	0.7% (1)	0	131
1520-1599	118	212	9	2	59	1	1	0	402
1600-1600	8.7% (7)	21.2% (17)	1.2% (1)	0	66.2% (53)	1.2% (1)	1.2% (1)	0	80
1610-1610	46.6% (77)	14.5% (24)	6.0% (10)	0	30.9% (51)	1.2% (2)	0.6% (1)	0	165
1620-1620	4.7% (1)	0	0	0	85.7% (18)	4.7% (1)	4.7% (1)	0	21
1630-1630	35.7% (30)	9.5% (8)	0	0	53.5% (45)	1.1% (1)	0	0	84
1640-1640	5% (6)	4.1% (5)	21.6% (26)	0	66.6% (80)	2.5% (3)	0	0	120
1650-1650	0.5% (1)	0	3.3% (6)	1.1% (2)	92.7% (167)	2.2% (4)	0	0	180
1660-1660	4.7% (4)	3.5% (3)	9.5% (8)	0	79.7% (67)	2.3% (2)	0	0	84
1670-1670	3.5% (5)	2.1% (3)	9.9% (14)	1.4% (2)	82.2% (116)	0.7% (1)	0	0	141
1680-1680	3.4% (6)	1.7% (3)	7.5% (13)	0	86.0% (148)	1.1% (2)	0	0	172
1690-1690	0.8% (1)	2.6% (3)	3.5% (4)	0	74.1% (83)	18.7% (21)	0	0	112
1600-1699	138	66	82	4	828	38	3	0	1159
1700-1700	3.4% (2)	0	3.4% (2)	0	51.7% (30)	41.3% (24)	0	0	58
1710-1710	3.0% (5)	0.6% (1)	5.5% (9)	0	52.1% (85)	37.4% (61)	0	1.2% (2)	163
1720-1720	2.2% (4)	4% (7)	6.2% (11)	0	58.2% (102)	29.1% (51)	0	0	175
1730-1730	2.3% (2)	0	3.4% (3)	0	50% (43)	43.0% (37)	0	1.1% (1)	86
1740-1740	8.0% (13)	5.5% (9)	3.1% (5)	0	47.8% (77)	35.4% (57)	0	0	161
1750-1750	6.0% (11)	0	0.5% (1)	0	48.6% (88)	44.7% (81)	0	0	181
1760-1760	2.4% (4)	1.8% (3)	3.1% (5)	0	51.5% (83)	40.9% (66)	0	0	161
1770-1770	3.6% (5)	2.1% (3)	5.7% (8)	0	53.6% (74)	34.7% (48)	0	0	138
1780-1780	8.1% (14)	0	1.7% (3)	0	33.3% (57)	56.7% (97)	0	0	171
1790-1790	4.2% (6)	1.4% (2)	11.9% (17)	0	34.5% (49)	47.8% (68)	0	0	142
1700-1799	66	25	64	0	688	590	0	3	1436
1800-1800	19.1% (23)	0.8% (1)	12.5% (15)	0	47.5% (57)	19.1% (23)	0	0.8% (1)	120
1810-1810	16.7% (25)	0	6.7% (10)	0	59.0% (88)	17.4% (26)	0	0	149
1820-1820	4.2% (4)	0	13.8% (13)	0	72.3% (68)	9.5% (9)	0	0	94
1830-1830	3.3% (4)	9.2% (11)	20.1% (24)	0	53.7% (64)	13.4% (16)	0	0	119
1840-1840	10.4% (10)	4.1% (4)	14.5% (14)	2.0% (2)	54.1% (52)	14.5% (14)	0	0	96
1850-1850	0	0	5.4% (4)	0	78.0% (57)	16.4% (12)	0	0	73
1860-1870	1.0% (3)	0	2.6% (8)	0	93.3% (279)	3.0% (9)	0	0	299
1800-1870	69	16	88	2	665	109	0	1	950
	391	319	243	8	2240	738	4	4	3947

前節で呈した「〈wegen+3 格〉はいつから出現したか」という疑問については、「散文コーパス 1520-1870」による限りでは、〈wegen+3 格〉という異形の初出は 16 世紀後半 (wegen dem zeugniß Dr. Peußers (Heiden 1598: Bl. B3^V) 「Dr. Peußers の証言のために」) であった。その約 20 年前には〈wegen+2 格〉(wegen des Euangelions

(Laurentius/ Fabricius 1576: 195)「福音書ゆえに」)が、さらにその約 30 年前には〈2 格+wegen〉(des ewigen worts wegen (Mosheim 1542: 39)「不変の言葉ゆえに」)が出現している。

では、どのようなプロセスで、どのような言語意識から、〈wegen+3 格〉という異形が現れたのであろうか。

2.3. 前置詞としての文法化

Di Meola (2000: 131) は「文法化 (Grammatikalisierung)」の程度を決定づけるパラメーターとして、「位置の変化 (Stellungswchsel)」、「格の交替 (Kasuswechsel)」、「脱意味化 (Desemantisierung)」を挙げている。以下では、wegen の脱意味化【第 1 段階】、位置の変化【第 2 段階】、格の交替【第 3 段階】という順で wegen が前置詞として文法化していった過程を見ていこう。

2.3.1. von の消失と wegen の脱意味化【第 1 段階】

すでに述べたように、wegen は、「中高ドイツ語の前置詞句 von X (2 格) wegen (「～の側(傍ら)から」)における名詞 *wec* の複数 3 格形に由来する」(Szczepaniak 2009: 98)。「散文コーパス 1520-1870」から一例を挙げる：

von des Römischen volcks wegen 「ローマの民衆の側から」

(Cicero/ Schwarzenberg/ Neuber 1537: 88)

2 格

=前置詞 **von** + 名詞句 des Römischen volcks **wegen** (前置詞 von に格支配された名詞 wegen)

16 世紀においては、先に挙げた [表 3] を見ればわかる通り、〈von+2 格+wegen〉と〈von wegen+2 格〉が競合しているが、16 世紀半ばから〈von+2 格+wegen〉の von が消失した〈2 格+wegen〉(例えば des ewigen worts wegen (Mosheim 1542: 39)「不変の言葉ゆえに」)という異形が出現している。そして 17 世紀の経過のなかで、von 付きの wegen が激減する。17 世紀に入ってからでも〈von+2 格+wegen〉という用法はたしかに確認されるが、その用例の 20-30%程度が von Rechts wegen

「法によって」、*von Amts wegen* 「職務上」等の慣用的な表現としての用法となっている。

この *von* の消失に伴って *wegen* の意味が変化する。この意味変化のプロセスは、Szczepaniak (2009: 99) に従い、次のように言い表すことができる。

「X の側から」

→ 「X に由来して」(由来)、「X をきっかけとして」(契機)

→ 「X に関わり生じた」(関与)

→ 「X 故に」(理由・原因)

すなわち、*wegen* は本来の「道、側」という名詞としての意味を失い、由来・契機を表す意味へ変化し、そこからさらに関与を表す意味を経由して、理由・原因を表す意味を獲得する。この意味用法は、「14、15 世紀に現れ、17 世紀に広まる」(Szczepaniak 2009: 99)。このようにして、*wegen* が本来持っていた意味が漸次的に希薄化し、「脱意味化」(ebd.: 98) していったのである。

2.3.2. *wegen* の前置 (*wegen* の文法化) 【第 2 段階】

[表 3] で確認できるとおり、*von* が脱落した異形として、16 世紀後半になって〈2 格+*wegen*〉の他に、〈*wegen*+2 格〉と〈*wegen*+3 格〉が出現する。このことは、*wegen* が名詞としての機能を脱して「前」置詞として機能し始めていること、文法化し始めていることを示している。Di Meola (2000: 173) によれば、「使用頻度の高い前置詞ほど、文法化の度合いが高い」。*wegen* は、歴史的に由来の新しい前置詞の中で使用頻度が最上位に位置づけられることからすると³⁾、新参者の前置詞のなかで最も文法化の度合いが高いことになる。Di Meola (2000) は、文法化の程度を決定づけるパラメーターのひとつである「位置の変化」に 3 つのケースを挙げているが、*wegen* はこの 3 つのケースすべてに当てはまる。

3) Di Meola (2000) は歴史的に由来の新しい前置詞として、使用頻度の高い順に *wegen*, *gegenüber*, *auf Grund/aufgrund*, *trotz*, *während* を挙げている (Di Meola 2000:173)。

- ① 囲い込み配置 (Zirkumposition) から wegen の前方配置へ
(von ... wegen → von wegen ...)
- ② 囲い込み配置の最初の成分の脱落 (von ... wegen → ... wegen)
- ③ wegen の後置から前置へ (... wegen → wegen...)

〈von+2 格+wegen〉のように、名詞が囲い込まれる配置関係では、名詞としての wegen (「側」) を別の名詞の 2 格が修飾している (「～の側」、wegen はまだ名詞の機能を有する。wegen が別の名詞の後に置かれる限り、wegen は名詞であるという意識が大幅に残っていて、前置詞としての十全の機能を果たすことができないのである。wegen は前置されて (別の名詞より前に置かれて) はじめて、文字通り前置詞としての機能を果たすようになった。

2.3.3. 支配する格の交替【第 3 段階】

von なしで単独で用いられた wegen が前置詞として認識されたことが、前置詞 wegen が 2 格以外の格を支配する可能性を開いたと言える。その現れが、「散文コーパス 1520-1870」に見られた 16 世紀後半における〈wegen+3 格〉の出現である。この歴史的変遷は、「位置の変化の後で格の交替」が起こり、「(前置詞が) 前置された場合にのみ、2 格と 3 格の交替は見られる」という Di Meola (2000: 140) の記述と合致している。Grimm (1922) によれば、「(von) wegen は、(中略) 名詞の後置 [すなわち、wegen の前置：筆者注] が普通になってきたことが原因で、古くからある前置詞の影響を受けて 3 格と結びつくことが多くなった」(Grimm 1922: 3100)。本来名詞であった wegen が、書き手 (話し手) に前置詞として確実に意識されればされるほど、名詞でないはずの wegen が 2 格と結びつくことに、書き手 (話し手) は違和感をもったということになる。

2.4. 〈wegen+3 格〉の台頭から急速な減少へ

von が脱落した wegen としては、〈2 格+wegen〉、〈wegen+2 格〉、〈wegen+ 3 格〉、〈wegen+4 格〉⁴⁾の 4 つの異形が存在する。「散文コーパス 1520-1870」によれば、1700 年まではこの 4 つの異形のうち〈wegen+2 格〉が圧倒的に他の 3 者をしのいでいる。〈2 格+wegen〉は全時代を通して頻度がおよそ 5%程度で横ばい状態を示している。それに対して、2.2 の [表 3] を見るとわかるように、〈wegen+3 格〉は増減の幅がきわめて大きく、18 世紀の一時期は〈wegen+2 格〉をしのいでさえいる。この〈wegen+2 格〉と〈wegen+ 3 格〉との競合関係を追ってみよう。「散文コーパス 1520-1870」における〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉の競合状態を示したのが次の [表 4] である。

[表 4] 「散文コーパス 1520-1870」における 2 格と 3 格の競合

	散文コーパス1520-1870		Σ
	wegen+Gen.	wegen+Dat.	
1520-1529	0/0		0
1530-1539	0/0		0
1540-1549	0/0		0
1550-1559	0/0		0
1560-1569	0/0		0
1570-1579	100% (2)	0	2
1580-1589	100% (8)	0	8
1590-1599	98% (49)	2% (1)	50
1600-1609	59		1 60
1610-1619	98.1% (53)	1.8% (1)	54
1620-1629	96.2% (51)	3.7% (2)	53
1630-1639	94.8% (48)	5.2% (3)	51
1640-1649	97.8% (45)	2.1% (1)	46
1650-1659	96.3% (80)	3.6% (3)	83
1660-1669	97.6% (167)	2.3% (4)	171
1670-1679	97.1% (67)	2.8% (2)	69
1680-1689	99.1% (16)	0.8% (1)	17
1690-1699	98.6% (148)	1.3% (2)	150
1700-1709	79.8% (83)	20.1% (21)	104
1710-1719	828		38 866
1720-1729	55.5% (30)	44.4% (24)	54
1730-1739	58.2% (85)	41.7% (61)	146
1740-1749	66.6% (102)	33.3% (51)	153
1750-1759	53.7% (43)	46.2% (37)	80
1760-1769	57.4% (77)	42.5% (57)	134
1770-1779	52.0% (88)	47.9% (81)	169
1780-1789	55.7% (83)	44.2% (66)	149
1790-1799	60.6% (74)	39.3% (48)	122
1800-1809	37.0% (57)	62.9% (97)	154
1810-1819	41.8% (49)	58.1% (68)	117
1820-1829	688	590	1278
1830-1839	71.2% (57)	28.7% (23)	80
1840-1849	77.1% (88)	17.4% (26)	114
1850-1859	88.3% (68)	9.5% (9)	77
1860-1869	80% (64)	20% (16)	80
1870-1879	78.7% (52)	21.2% (14)	66
1880-1889	82.6% (57)	17.3% (12)	69
1890-1899	96.8% (279)	3.1% (9)	288
1900-1870	665	109	774
1520-1870	2240	738	2978

4) 〈wegen+4 格〉という異形は、「散文コーパス 1520-1870」では 4 例のみ確認できた (2.2 の [表 3])。また、3.2 の注 9、4.4 の注 18 も参照のこと。

17 世紀後半までは圧倒的に優勢であった〈wegen+2 格〉が、18 世紀に入る頃から次第に減少している。それとは対照的に、1700 年代から〈wegen+3 格〉が台頭する。⁵⁾そしてその後 18 世紀において〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉は、ほぼ拮抗している。ところが、1800 年直前を境として、2 格と 3 格の競合状態に大きな変化が見られる。18 世紀に入って減少傾向にあった〈wegen+2 格〉が 1800 年直前を境に再び勢力を取り戻し、その一方で、〈wegen+3 格〉は 18 世紀以降増加傾向にあり、2 格と拮抗していたにもかかわらず、1800 年代に入って減少しているのである。

対数尤度比 (Log-Likelihood Ratio:LL) による有意差検定に基づいて〈wegen+2 格〉、〈wegen+3 格〉、それぞれの用例数を 18、19 世紀で比較してみると、次のような結果になる：

[表 5] 〈wegen+2 格〉の出現頻度の有意差検定: 19 世紀 (O1) vs 18 世紀 (O2) ⁶⁾

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	665	70.00	688	47.91	+ 48.22

[表 6] 〈wegen+3 格〉の出現頻度の有意差検定：19 世紀 (O1) vs 18 世紀 (O2)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	109	11.47	590	41.09	- 194.76

5) ちょうど 1700 年に出版された書籍に、そのタイトルが、*Wegen dem Feiertag*“と〈wegen+3 格〉になっているものがあるのは象徴的に思われる。(Sailer, Johann Michael (1700): *Wegen dem Feiertag, ist Feuer im Dach Das ist: Hitziger Wortstreit zwischen dem Bauern, und ihren Herrn Pfarrer, wegen der geminderten Zahl der Feiertägen.*)

6) この表の見方を説明しておこう。この表は、<http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html> にある Paul Rayson による対数尤度比 (LL) の計算法に依拠したものである。上段の O1 とはコーパス 1 (19 世紀) における調査項目の総用例数、%1 はコーパス 1 (19 世紀) における調査項目の出現頻度を示している。同様に、O2 とはコーパス 2 (18 世紀) における用例数、%2 はコーパス 2 (18 世紀) における調査項目の出現頻度を表している。LL は対数尤度比の値であり、マイナスがついた値はコーパス 1 においての方がコーパス 2 より調査項目の出現頻度が低いことを、プラスがついた値はコーパス 1 においての方がコーパス 2 より出現頻度が高いことを表している。

0.1%水準の場合、棄却限界値となる対数尤度比は 10.83 である。⁷⁾ [表 5] の〈*wegen*+2 格〉の対数尤度比 (LL: +48.22) と、[表 6] の〈*wegen*+3 格〉の対数尤度比 (LL: -194.76) はどちらもこの 10.83 をはるかに超えているので、〈*wegen*+2 格〉の出現も〈*wegen*+3 格〉の出現も 18 世紀と 19 世紀において有意差を持って変化していると言え、とくに〈*wegen*+3 格〉の場合の激減ぶり (LL: -194.76) は統計学的にも明らかである。

2.5. 地域による相違

以上、それぞれの書籍の出版地域の違いを顧慮することをせずに「散文コーパス 1520-1870」の分析を進めてきた。この節では、出版地がドイツ南部（上部ドイツ語圏）である印刷書籍とドイツ中部北部（上部ドイツ語圏以外）である印刷書籍の間で、*wegen* の異形の選択に差が見られるのかについて見ていきたい。出版地が上部ドイツ語圏であるものと上部ドイツ語圏以外（つまり中部・北部ドイツ語圏）であるものとに分けて集計し直したものが、次の[表 7]と[表 8]である。

7) 対数尤度比 (LL) の値が 10.83 を超えると、2 つの集団における調査項目の出現の差が有意な差であるという判断が過誤である可能性が千回に 1 回、つまり 0.1%以下となるという意味。

[表 7] 上部ドイツ語圏における wegen の出現状況

散文コーパス 1520-1870: Oberdeutsch									
	von+Gen. +wegen	von wegen +Gen.	Gen.+ wegen	um+Gen.+ wegen	wegen+ Gen.	wegen+ Dat.	von wegen+ Dat.	wegen+ Akk.	Σ
1520-1529	100% (2)	0	0	0	0	0	0	0	2
1530-1539	57.8% (11)	42.1% (8)	0	0	0	0	0	0	19
1540-1549	0	83.3% (5)	0	16.6% (1)	0	0	0	0	6
1550-1559	75% (3)	25% (1)	0	0	0	0	0	0	4
1560-1569	21.1% (11)	76.9% (40)	1.9% (1)	0	0	0	0	0	52
1570-1579	40% (6)	60% (9)	0	0	0	0	0	0	15
1580-1589	25.6% (19)	72.9% (54)	1.3% (1)	0	0	0	0	0	74
1590-1599	74.4% (33)	52.7% (39)	1.3% (1)	0	0	0	1.3% (1)	0	74
1600-1609	85	156	3	1	0	0	0	1	246
1610-1619	9.0% (6)	19.6% (13)	1.5% (1)	0	68.1% (45)	0	1.5% (1)	0	66
1620-1629	61% (61)	7% (7)	7% (7)	0	24% (24)	0	1% (1)	0	100
1630-1639	0	0	0	0	100% (13)	0	0	0	13
1640-1649	50% (29)	13.7% (8)	0	0	34.4% (20)	1.7% (1)	0	0	58
1650-1659	13.6% (6)	0	11.3% (6)	0	70.4% (31)	4.5% (2)	0	0	44
1660-1669	0	0	6.6% (1)	6.6% (1)	86.6% (13)	0	0	0	15
1670-1679	0	3.4% (2)	12.0% (7)	0	82.7% (49)	1.7% (1)	0	0	58
1680-1689	6.2% (3)	0	4.1% (2)	2.0% (1)	87.5% (42)	0	0	0	48
1690-1699	2.4% (2)	0	3.7% (3)	0	92.5% (75)	1.0% (1)	0	0	81
1700-1709	1.2% (1)	3.6% (3)	4.8% (4)	0	65.0% (64)	25.3% (21)	0	0	83
1710-1719	108	33	30	2	365	26	2	0	566
1720-1729	0	0	0	0	15.3% (4)	84.6% (22)	0	0	26
1730-1739	0	0	1.0% (1)	0	31.5% (29)	65.2% (60)	0	2.1% (2)	92
1740-1749	0	0.9% (1)	6.7% (7)	0	43.2% (45)	49.0% (51)	0	0	104
1750-1759	1.5% (1)	0	4.7% (3)	0	33.3% (21)	58.7% (37)	0	1.5% (1)	63
1760-1769	2.1% (2)	6.3% (6)	2.1% (2)	0	52.6% (50)	36.8% (35)	0	0	95
1770-1779	7.8% (6)	0	1.3% (1)	0	40.7% (31)	50% (38)	0	0	76
1780-1789	0	1.5% (1)	4.6% (3)	0	56.9% (37)	36.9% (24)	0	0	65
1790-1799	2.5% (1)	2.5% (1)	0	0	32.5% (13)	62.5% (25)	0	0	40
1800-1809	0	0	1.2% (1)	0	1.2% (1)	97.4% (75)	0	0	77
1810-1819	7.3% (6)	1.2% (1)	9.7% (8)	0	28.0% (23)	53.6% (44)	0	0	82
1820-1829	16	10	26	0	254	411	0	0	720
1830-1839	0	0	18.1% (8)	0	75% (33)	6.8% (3)	0	0	44
1840-1849	1.4% (1)	0	10% (7)	0	61.4% (43)	27.1% (19)	0	0	70
1850-1859	3.9% (2)	0	13.7% (7)	0	64.7% (33)	17.6% (9)	0	0	51
1860-1869	6.3% (4)	17.4% (11)	1.5% (1)	0	50.7% (32)	23.8% (15)	0	0	63
1870-1879	0	6.6% (3)	13.3% (6)	2.2% (1)	60% (27)	17.7% (8)	0	0	45
1880-1889	0	0	5.8% (3)	0	72.5% (37)	21.5% (11)	0	0	51
1890-1899	1.3% (3)	0	1.3% (3)	0	93.9% (203)	3.2% (7)	0	0	216
1900-1970	10	14	35	1	406	72	0	0	540
1820-1870	219	213	94	4	1027	509	3	3	2072

[表 8] 上部ドイツ語圏以外（中部・北部ドイツ語圏）における wegen の出現状況

	散文コーパス 1520-1870: Mittel- und Norddeutsch								Σ
	von+Gen.+ wegen	von wegen+ Gen.	Gen.+ wegen	um+Gen.+ wegen	wegen+ Gen.	wegen+ Dat.	von wegen+ Dat.	wegen+ Akk.	
1520-1520	0	100% (1)	0	0	0	0	0	0	1
1530-1530	0	100% (2)	0	0	0	0	0	0	2
1540-1540	63.6% (7)	27.2% (3)	9.0% (1)	0	0	0	0	0	11
1550-1550	41.6% (5)	58.3% (7)	0	0	0	0	0	0	12
1560-1560	47.3% (18)	44.7% (17)	5.2% (2)	2.6% (1)	0	0	0	0	38
1570-1570	0	90% (18)	0	0	10% (2)	0	0	0	20
1580-1580	13.3% (2)	26.6% (4)	6.6% (1)	0	53.3% (8)	0	0	0	15
1590-1590	1.7% (1)	7.0% (4)	3.5% (2)	0	85.9% (49)	1.7% (1)	0	0	57
1520-1599	7.1% (1)	28.5% (4)	0	0	57.1% (8)	0.7% (1)	0	0	156
1600-1600	24.6% (16)	26.1% (17)	4.6% (3)	0	41.5% (27)	3.0% (2)	0	0	65
1610-1610	12.5% (1)	0	0	0	62.5% (5)	12.5% (1)	12.5% (1)	0	8
1630-1630	3.8% (1)	0	0	0	96.1% (25)	0	0	0	26
1640-1640	0	6.5% (5)	27.6% (21)	0	64.4% (49)	1.3% (1)	0	0	76
1650-1650	0.6% (1)	0	3.0% (5)	0.6% (1)	93.3% (154)	2.4% (4)	0	0	165
1660-1660	15.3% (4)	3.8% (1)	3.8% (1)	0	73.0% (19)	3.8% (1)	0	0	26
1670-1670	2.1% (2)	3.2% (3)	12.9% (12)	1.0% (1)	79.5% (74)	1.0% (1)	0	0	93
1680-1680	4.3% (4)	3.2% (3)	10.9% (10)	0	80.2% (73)	1.0% (1)	0	0	91
1690-1690	0	0	0	0	100% (29)	0	0	0	29
1600-1699	6.2% (2)	0	6.2% (2)	0	81.2% (26)	6.2% (2)	0	0	32
1700-1700	7.0% (5)	1.4% (1)	11.2% (8)	0	78.8% (56)	1.4% (1)	0	0	71
1720-1720	5.6% (4)	8.4% (6)	5.6% (4)	0	80.2% (57)	0	0	0	71
1730-1730	4.3% (1)	0	0	0	95.6% (22)	0	0	0	23
1740-1740	16.6% (11)	4.5% (3)	4.5% (3)	0	40.9% (27)	33.3% (22)	0	0	66
1760-1760	4.7% (5)	0	0	0	54.2% (57)	40.9% (43)	0	0	105
1760-1769	4.1% (4)	2.0% (2)	2.0% (2)	0	47.9% (46)	45.7% (42)	0	0	96
1770-1770	4.0% (4)	2.0% (2)	8.1% (8)	0	62.2% (61)	23.4% (23)	0	0	98
1780-1780	14.8% (14)	0	2.1% (2)	0	59.5% (56)	23.4% (22)	0	0	94
1790-1790	0	1.6% (1)	15% (9)	0	34.6% (26)	32% (24)	0	0	60
1700-1799	30.2% (23)	1.3% (1)	9.2% (7)	0	31.5% (24)	26.3% (20)	0	1.3% (1)	76
1810-1810	30.3% (24)	0	3.7% (3)	0	56.9% (45)	8.8% (7)	0	0	79
1820-1820	4.6% (2)	0	13.9% (6)	0	81.3% (35)	0	0	0	43
1830-1830	0	0	41.0% (23)	0	57.1% (32)	1.7% (1)	0	0	56
1840-1840	19.6% (10)	1.9% (1)	15.6% (8)	1.9% (1)	49.0% (25)	11.7% (6)	0	0	51
1850-1850	0	0	4.5% (1)	0	90.9% (20)	4.5% (1)	0	0	22
1860-1870	0	0	6.0% (5)	0	91.5% (76)	2.4% (2)	0	0	83
1800-1870	59	2	53	1	257	37	0	1	410
1520-1870	172	106	149	4	1213	229	1	1	1875

以上2つの表に示した地域別の各異形の出現状況のうち、2.4で論じた〈wegen+2格〉と〈wegen+3格〉との競合関係に焦点を当てて地域別に示すと、次の[表9]のようになる。

[表 9] 「散文コーパス 1520-1870」における〈wegen+2 格〉〈wegen+3 格〉の競合
(地域別)

	Oberdeutsch					Mittel- und Norddeutsch				
	wegen+Gen.	wegen+Dat.	Gen.	Dat.	Σ	wegen+Gen.	wegen+Dat.	Gen.	Dat.	Σ
1520-1529	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1530-1539	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1540-1549	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1550-1559	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1560-1569	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1570-1579	0	0	0	0	0	100% (2)	0	2	0	2
1580-1589	0	0	0	0	0	100% (8)	0	8	0	8
1590-1599	0	0	0	0	0	98% (49)	2% (1)	49	1	50
1600-1609	100% (45)	0	45	0	45	88.8% (8)	11.1% (1)	59	1	60
1610-1619	100% (24)	0	24	0	24	93.1% (27)	6.8% (2)	27	2	29
1620-1629	100% (13)	0	13	0	13	83.3% (5)	16.6% (1)	5	1	6
1630-1639	95.2% (20)	4.7% (1)	20	1	21	100% (25)	0	25	0	25
1640-1649	93.9% (31)	6.0% (2)	31	2	33	98% (49)	2% (1)	49	1	50
1650-1659	100% (13)	0	13	0	13	97.4% (154)	2.5% (4)	154	4	158
1660-1669	97.9% (48)	2.0% (1)	48	1	49	95% (19)	5% (1)	19	1	20
1670-1679	100% (42)	0	42	0	42	98.6% (74)	1.3% (1)	74	1	75
1680-1689	98.6% (75)	1.3% (1)	75	1	76	98.6% (73)	1.3% (1)	73	1	74
1690-1699	72% (54)	28% (21)	54	21	75	100% (29)	0	29	0	29
1700-1709	15.3% (4)	84.6% (22)	365	26	391	92.8% (26)	7.1% (2)	463	12	475
1710-1719	32.5% (29)	67.4% (60)	4	22	26	98.2% (56)	1.7% (1)	26	2	28
1720-1729	46.8% (45)	53.1% (51)	29	60	89	100% (57)	0	56	1	57
1730-1739	36.2% (21)	63.7% (37)	45	51	96	100% (22)	0	22	0	22
1740-1749	58.8% (50)	41.1% (35)	21	37	58	55.1% (27)	44.8% (22)	27	22	49
1750-1759	44.9% (31)	55.0% (38)	31	38	69	57% (57)	43% (43)	57	43	100
1760-1769	60.6% (37)	39.3% (24)	37	24	61	52.2% (46)	47.7% (42)	46	42	88
1770-1779	34.2% (13)	65.7% (25)	13	25	38	72.6% (61)	27.3% (23)	61	23	84
1780-1789	1.3% (1)	98.6% (75)	1	75	76	71.7% (56)	28.2% (22)	56	22	78
1790-1799	34.3% (23)	65.6% (44)	23	44	67	52% (26)	48% (24)	26	24	50
1700-1799			254	411	665			434	179	613
1800-1809	91.6% (33)	8.3% (3)	33	3	36	54.5% (24)	45.4% (20)	24	20	44
1810-1819	69.3% (43)	30.6% (19)	43	19	62	86.5% (45)	13.4% (7)	45	7	52
1820-1829	78.5% (33)	21.4% (9)	33	9	42	100% (35)	0	35	0	35
1830-1839	68.0% (32)	31.9% (15)	32	15	47	96.9% (32)	3.0% (1)	32	1	33
1840-1849	77.1% (27)	22.8% (8)	27	8	35	80.6% (25)	19.3% (6)	25	6	31
1850-1859	77.0% (37)	22.9% (11)	37	11	48	95.2% (20)	4.7% (1)	20	1	21
1860-1870	96.6% (203)	3.3% (7)	203	7	210	97.4% (76)	2.5% (2)	76	2	78
1800-1870			408	72	480			257	37	294
1520-1870			1019	554	1536			1187	228	1442

上部ドイツ語圏と上部ドイツ語圏以外（中部・北部ドイツ語圏）における〈*wegen*+3格〉の出現状況（1520年～1870年までの350年間）を有意差検定によって比較すると、以下のような結果になる：

[表 10] 〈*wegen*+3格〉の出現頻度の有意差検定（1520-1870）：
上部ドイツ語圏（O1）VS 上部ドイツ語圏以外（O2）

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	554	26.74	228	12.16	+ 109.52

コーパス 1 を上部ドイツ語圏、コーパス 2 を上部ドイツ語圏以外として比較したところ、コーパス 1 とコーパス 2 の間の差(LL:+109.52)は、0.1%水準(LL: 10.83)をはるかに超えている。つまり、コーパス 1（上部ドイツ語圏）のほうが有意な差を持って〈*wegen*+3格〉の出現が多いのである。

では、2.4 で確認した 1800 年直前を境とした大きな変化についても、地域差は存在するのだろうか。[表 9] をもとに 1700～1870 年を 50 年ごとに区切り、〈*wegen*+2格〉と〈*wegen*+3格〉の競合状態を地域別に見ていくと、次のような傾向を指摘することができる：

[表 11] 〈*wegen*+2格〉VS 〈*wegen*+3格〉の地域別の競合状態の推移

	上部ドイツ語圏	上部ドイツ語圏以外
1700-1749	3格が優勢	圧倒的に2格が優勢
1750-1799	1770年代から圧倒的に3格優勢	2格、3格が拮抗状態
1800-1849	3格が減少し、2格が優勢	1810年代から圧倒的に2格が優勢
1850-1870	圧倒的に2格が優勢	ほぼ2格のみ

以上の傾向が本当に指摘できるかどうか、有意差検定によって検証してみよう。上部ドイツ語圏、および上部ドイツ語圏以外において、〈*wegen*+2格〉と〈*wegen*+3格〉が18世紀、19世紀でどのような推移をたどったのか、対数尤度比で示してみる。コーパス 1 は19世紀の用例、コーパス 2 は18世紀の用例である：

[表 12] 〈wegen+2 格〉の出現頻度の有意差検定：

19 世紀 (O1) vs 18 世紀 (O2) (上部ドイツ圏)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	408	75.56	254	35.28	+ 94.11

[表 13] 〈wegen+3 格〉の出現頻度の有意差検定：

19 世紀 (O1) vs 18 世紀 (O2) (上部ドイツ圏)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	72	13.33	411	57.08	- 175.24

[表 12] と [表 13] で明らかなおり、上部ドイツ語圏では、有意な差を持って 〈wegen+2 格〉は 19 世紀に増加し (LL:+94.11)、〈wegen+3 格〉は 19 世紀に減少している (LL:-175.24) と言える。

次に上部ドイツ語圏以外を見てみよう。〈wegen+2 格〉と 〈wegen+3 格〉の出現頻度について 18 世紀と 19 世紀とを対数尤度比検定してみると、次の通りである：

[表 14] 〈wegen+2 格〉の出現頻度の有意差検定：

19 世紀 (O1) vs 18 世紀 (O2) (上部ドイツ圏以外)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	257	62.68	434	60.61	+ 0.18

[表 15] 〈wegen+3 格〉の出現頻度の有意差検定：

19 世紀 (O1) vs 18 世紀 (O2) (上部ドイツ圏以外)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	37	9.02	179	25.00	- 39.02

[表 14] で明らかのように、上部ドイツ語圏以外における 〈wegen+2 格〉の出

現については、コーパス 1 (19 世紀) とコーパス 2 (18 世紀) の間の差 (LL: +0.18) は、0.1%水準 (LL: 10.83) を下回るので、18 世紀と 19 世紀の間に〈wegen+2 格〉の頻度に関して 0.1%水準では有意な差があるとは言えない。一方、[表 15] で明らかかなように、上部ドイツ語圏以外における〈wegen+3 格〉については、有意な差を持って〈wegen+3 格〉は 19 世紀に減少していると言える (LL:-39.02)。

以上のことをまとめると、次の通りである：

- (1) 〈wegen+3 格〉の出現頻度は、著しく高い有意差を持って上部ドイツ語圏の印刷書籍のほうが高い。
- (2) 〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉の出現頻度が 18 世紀と 19 世紀とで異なる程度は、上部ドイツ語圏の印刷書籍のほうが圧倒的に高い。したがって、出版地を考慮せずに算出した時に見えた 1800 年直前を境にしての〈wegen+3 格〉の激減 ([表 3]) は、上部ドイツ語圏における〈wegen+3 格〉の激減が大きく関わっている。

上部ドイツに〈wegen+3 格〉が多いという結果は、Dal (2014) の「wegen における 3 格は特に南ドイツで広まっている」(Dal 2014: 63) という発言と一致している。

3. 18 世紀の文学テキストの分析

3.1. 〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉の出現頻度

以上、第 2 章では、文学作品を除外した「散文コーパス 1520-1870」を分析することで、wegen の異形について考察を行ってきた。それによって、18 世紀の経過の中で〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉との競合関係に興味深い変遷のプロセスが見られることがわかった。そこで、同様の傾向性が文学作品においても確認できるかどうかについて見ていきたい。その目的のために、「18 世紀ドイツ文学データベース」⁸⁾を使用する。1700~1799 年まで、10 年毎に 4 冊ずつ文献 (計 40

8) *Deutsche Literatur des 18. Jahrhunderts Online* (de Gruyter) は学習院大学が所蔵する 18 世紀ドイツ文学のデータベースである。作家 642 人分の全 4494 冊を収め、出身地、教育歴、職業など、作家の情報も掲載されている。

冊)を選定し、wegen の出現状況を調査した。地域の偏りを避けるために、各時期について、上部ドイツ語圏の出身である著者による文献を2冊、上部ドイツ語圏以外の出身の著者によるものを2冊選んだ。その際、「散文コーパス 1520-1870」と同様に、「18 世紀ドイツ文学データベース」においても、格が語形から特定できる男性・中性の単数名詞のみ（普通名詞のみで、代名詞類は除く）を調査対象とした。

「18 世紀ドイツ文学データベース」における8つの異形の出現状況を示したものが、次の〔表 16〕である：

〔表 16〕「18 世紀ドイツ文学データベース」に見る wegen の出現状況（異形別）

	18世紀ドイツ文学データベース								Σ
	von+Gen.+ wegen	von wegen+Gen.	Gen.+wegen	um+Gen.+ wegen	wegen+Gen.	wegen+Dat.	von wegen+Dat.	wegen+Akk.	
1700-1709	3.5% (1)	0	7.1% (2)	0	89.2% (25)	0	0	0	28
1710-1719	0	0	7.1% (2)	0	92.8% (26)	0	0	0	28
1720-1729	0	7.6% (2)	42.3% (11)	3.8% (1)	38.4% (10)	7.6% (2)	0	0	26
1730-1739	12.5% (7)	1.7% (1)	28.5% (8)	0	51.7% (29)	3.5% (2)	1.7% (1)	0	56
1740-1749	0	0	19.0% (4)	0	61.9% (13)	14.2% (3)	0	4.7% (1)	21
1750-1759	9.7% (4)	0	24.3% (10)	0	63.4% (26)	2.4% (1)	0	0	41
1760-1769	0	0	27.2% (3)	0	36.3% (4)	36.3% (4)	0	0	11
1770-1779	6.4% (2)	0	19.3% (6)	3.2% (1)	67.7% (21)	3.2% (1)	0	0	31
1780-1789	9.0% (3)	0	15.1% (5)	0	54.5% (18)	21.2% (7)	0	0	33
1790-1799	9.5% (2)	4.7% (1)	14.2% (3)	0	66.6% (14)	4.7% (1)	0	0	21
	19	4	62	2	186	21	1	1	296

この結果を、「散文コーパス 1520-1870」の同時代の結果（〔表 3〕）と比較してみよう。すると、「18 世紀ドイツ文学データベース」の場合、文学以外の「散文コーパス 1520-1870」と比べて、〈格+wegen〉の頻度が高いこと、そして〈wegen+3 格〉が全体的に少ないという傾向性が指摘できる。〈wegen+3 格〉は「18 世紀ドイツ文学データベース」では全 296 例中 21 例（7.09%）であり、「散文コーパス 1520-1870」（のうち 1700～1799 年）全 1436 例中 590 例（41.08%）を大幅に下回っている。この数値の有意差を検定したものが次の表である：

[表 17] 〈wegen+3 格〉の出現頻度の有意差検定：

「18 世紀ドイツ文学データベース」(O1) VS 散文コーパス 1700-1799 (O2)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	21	7.09	590	41.09	- 112.52

上記の対数尤度比 (LL:-112.52) から、「18 世紀ドイツ文学データベース」における〈wegen+3 格〉の出現頻度は、「散文コーパス 1520-1870」の同時代においてよりも、圧倒的な有意差をもって低いということが言える。

3.2. 作家の出身地による相違

[表 16] のデータをさらに作家の出身地域別 (上部ドイツ語圏と上部ドイツ語圏以外) に分類したものが、次の [表 18]、[表 19] である：

[表 18] 「18 世紀ドイツ文学データベース」に見る wegen の出現状況 (全 128 例)
(上部ドイツ語圏出身の作家の場合)

18世紀ドイツ文学データベース: Oberdeutsch									
	von+Gen.+ wegen	von wegen+ Gen.	Gen.+wegen	um+Gen.+ wegen	wegen+Gen.	wegen+Dat.	von wegen+Dat.	wegen+Akk.	Σ
1700-1709	0	0	0	0	100% (16)	0	0	0	16
1710-1719	0	0	0	0	100% (15)	0	0	0	15
1720-1729	0	0	26.6% (4)	6.6% (1)	53.3% (8)	13.3% (2)	0	0	15
1730-1739	38.4% (6)	0	0	0	38.4% (6)	15.3% (2)	7.6% (1)	0	13
1740-1749	0	0	0	0	50% (4)	37.5% (3)	0	12.5% (1)	8
1750-1759	44.4% (4)	0	22.2% (2)	0	33.3% (3)	0	0	0	9
1760-1769	0	0	0	0	33.3% (2)	66.6% (4)	0	0	6
1770-1779	8.3% (1)	0	0	8.3% (1)	75% (9)	8.3% (1)	0	0	12
1780-1789	14.2% (3)	0	4.7% (1)	0	57.1% (12)	23.8% (5)	0	0	21
1790-1799	15.3% (2)	0	0	0	84.6% (11)	0	0	0	13
	15	0	7	2	85	17	1	1	128

[表 19] 「18 世紀ドイツ文学データベース」に見る wegen の出現状況 (全 168 例)
(上部ドイツ語圏以外出身の作家の場合)

	18世紀ドイツ文学データベース: Mittel- und Norddeutsch								Σ
	von+Gen.+ wegen	von wegen+Gen.	Gen.+wegen	um+Gen.+ wegen	wegen+Gen.	wegen+Dat.	von wegen+Dat.	wegen+Akk.	
1700-1709	8.3% (1)	0	16.6% (2)	0	75% (9)	0	0	0	12
1710-1719	0	0	15.3% (2)	0	84.6% (11)	0	0	0	13
1720-1729	0	18.1% (2)	63.6% (7)	0	18.1% (2)	0	0	0	11
1730-1739	4.6% (2)	2.3% (1)	37.2% (16)	0	55.8% (24)	0	0	0	43
1740-1749	0	0	30.7% (4)	0	69.2% (9)	0	0	0	13
1750-1759	0	0	25% (8)	0	71.8% (23)	3.1% (1)	0	0	32
1760-1769	0	0	60% (3)	0	40% (2)	0	0	0	5
1770-1779	5.2% (1)	0	31.5% (6)	0	63.1% (12)	0	0	0	19
1780-1789	0	0	33.3% (4)	0	50% (6)	16.6% (2)	0	0	12
1790-1799	0	12.5% (1)	37.5% (3)	0	37.5% (3)	12.5% (1)	0	0	8
	4	4	55	0	101	4	0	0	168

[表 18] と [表 19] とを比較すると、まず 8 つの異形のうち 7 種類が上部ドイツ語圏出身の作家たちに現れていることがわかる。⁹⁾

〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉の競合関係をクローズアップして作家の出身地域別に示すと、次の [表 20] のようになる：

9) この点を含めて確認できる、上部ドイツ語圏出身である作家と上部ドイツ語圏以外出身の作家の違いは、次の通りである：1) 〈um+2 格+wegen〉、〈von wegen+3 格〉、〈wegen+4 格〉という異形は、上部ドイツ語圏出身の作家のみに確認される。例：um meines Nutzen [sic!] wegen 「私の利益ゆえに」(Bodmer 1722: 195)、von wegen dem Calender 「暦のために」(Haller 1732: 66)、wegen ihren herrlichen Verdienst 「素晴らしい功績のために」(Richter 1740: 22)、2) 〈2 格+wegen〉は、上部ドイツ語圏以外の出身である作家において頻度が高い。例：seines Brudermords wegen 「兄弟殺しゆえに」(Löscher 1705: 8)、3) 〈von wegen+2 格〉という異形は、上部ドイツ語圏出身の作家には見られない。例：von wegen meines Sohnes 「私の息子ゆえに」(Brandes 1790: 152)

[表 20] 「18 世紀ドイツ文学データベース」に見る
 〈wegen+2 格〉と〈wegen+3 格〉の競合（作家の出身地域別）

	Oberdeutsch					Mittel- und Norddeutsch				
	wegen+Genitiv	wegen+Dativ	G.	D.	Σ	wegen+Genitiv	wegen+Dativ	G.	D.	Σ
1700-1709	100% (16)	0	16	0	16	100% (9)	0	9	0	9
1710-1719	100% (15)	0	15	0	15	100% (11)	0	11	0	11
1720-1729	80% (8)	20% (2)	8	2	10	100% (2)	0	2	0	2
1730-1739	71.4% (5)	28.5% (2)	5	2	7	100% (24)	0	24	0	24
1740-1749	57.1% (4)	42.8% (3)	4	3	7	100% (9)	0	9	0	9
1750-1759	100% (3)	0	3	0	3	95.8% (23)	4.1% (1)	23	1	24
1760-1769	33.3% (2)	66.6% (4)	2	4	6	100% (2)	0	2	0	2
1770-1779	81.8% (9)	9.0% (1)	9	1	10	63.1% (12)	0	12	0	12
1780-1789	70.5% (12)	29.4% (5)	12	5	17	75% (6)	25% (2)	6	2	8
1790-1799	100% (11)	0	11	0	11	75% (3)	25% (1)	3	1	4
1700-1809			85	17	102			101	4	105

上部ドイツ語圏の作家の場合、〈wegen+ 2 格〉が圧倒的に優勢であるものの、1720 年以降（1750、1790 年代は除いて）、〈wegen+ 3 格〉の頻度もかなり高いように見える。一方、上部ドイツ語圏以外の作家の場合、100 年間で〈wegen+3 格〉の用例がわずか 4 例にしか過ぎない（例：wegen dem grossen Heile (Gottsched 1751: 208) 「偉大なる救済のために」）。

有意差検定によって〈wegen+3 格〉の出現頻度を作家の出身地域別に比較すると、次のような結果になる（コーパス 1 は上部ドイツ語圏、コーパス 2 は上部ドイツ語圏以外である）：

[表 21] 「18 世紀ドイツ文学データベース」における〈wegen+3 格〉の出現頻度の有意差検定：上部ドイツ語圏 (O1) vs 上部ドイツ語圏以外 (O2)

Item	O1	%1	O2	%2	LL
Word	17	13.28	4	2.38	+ 12.58

つまり、〈wegen+ 3 格〉の出現頻度は、コーパス 1（上部ドイツ語圏の出身の作家）とコーパス 2（上部ドイツ語圏以外出身の作家）の間の差（LL: +12.58）は

0.1%水準 (LL: 10.83) を上回るので、上部ドイツ語圏出身の作家の方に有意な差を持って〈wegen+3 格〉が多いとすることができる。したがって、18 世紀の文学作品においても、上部ドイツ語圏の方が〈wegen+3 格〉の使用頻度が高いということが確認できる。

4. 文法書と辞書におけるメタ言語言説の歴史

さて、本章では、文法書と辞書に書かれた言語に関する明示的な発言・言説に注目する。¹⁰⁾1578 年から 1870 年までの 40 冊の文法書・辞書を調査した (書誌情報については、参考文献「一次文献」を参照)。このようにして、文法家たちによるメタ言語言説を、これまで見てきた言語体系史と言語使用史からわかる言語意識とつぎ合わせることで、wegen の各異形に対する言語意識の変化を、より正確に再構成することができる。

4.1. von が付いた wegen に関する評価

〈von+2 格+wegen〉という異形は、「散文コーパス 1520-1870」の分析結果によれば、1600 年代後半になると使用頻度が減るが、それでも 1870 年に至るまで消滅することはなく、平均すると全異形中で 5%程度の頻度で推移していった。この異形について、18 世紀末に Adelung (1781) は von Rechts wegen という例を示しながら、この異形はもはやいくつかの「慣用表現」(Adelung 1781: 350) でのみ使用される異形であると指摘している (現在も von Rechts wegen, von Amts wegen という形で生き残っている。) この発言を除いて、文法家たちはなんら価値判断を下していない。

〈von wegen+2 格〉も、〈von+2 格+wegen〉と同じく、1870 年に至るまで消滅することはなく、1620 年代以降は平均すると「散文コーパス 1520-1870」の全異形中で 2%程度の頻度で推移している。「wegen の前に um を置く人もいるが¹¹⁾、それは von wegen の場合の von ほどよくはない」(Gottsched 1748: 442) という発言から、18 世紀中頃において〈um+2 格+wegen〉という異形に対してはあった違和

10) Takada (1998) は、17 世紀におけるメタ言語発言に基づいて、当時の「文法と言語の現実」との関係を明らかにした、興味深い研究である。

11) 〈um+2 格+wegen〉という um を伴った異形は、第 2 章の「散文コーパス 1520-1870」では 8 例確認できた (2.2. [表 3] 参照)。

感が、〈*von wegen*+2 格〉という異形に対してはなかったことがうかがえる。しかし、その後 18 世紀末になると、Adelung (1786: 110) が *von wegen seines Fleisses* という例を挙げ、この *von* は *um* と同様、「庶民の話し方」に見られる「まったく余計なもの」であるという評価を下している。この発言の根拠は、この異形がその間に減少したというような頻度にあるのではなく、*wegen* が単独で前置詞として十分に機能できているのに、*von wegen* という 2 語を用いることにあると思われる。〈*von wegen*+2 格〉と同程度に頻度が低い〈*von*+2 格+*wegen*〉については、上に見たとおり Adelung は何も評価を下していないことから、*von wegen* という 2 語による前置詞について拒否しているのであろう。この Adelung による否定的な評価以降、〈*von wegen*+2 格〉という異形は、さまざまな文法家たちによって否定的な評価を与えられることとなった。Campe (1810: 612)¹²⁾はこの異形を「よくない」、「余計なもの」と評価し、Salzmann (1836: 164) に至っては、明確に「誤り」という評価を与えている。Heinsius (1825: 199) は、「官庁文体ではまだ普通に用いられている」*von Rechts wegen* のような表現についても「誤り」とであると見なしている。

4.2. 後置された *wegen* に関する評価

〈2 格+*wegen*〉という、前置詞が後置されている異形は、「散文コーパス 1520-1870」においては 1542 年に出現してから 19 世紀に至るまで、平均 5 パーセント台でほぼ横ばいで用例が確認できる。このように *wegen* が後置されることに関しては、前節の〈*von wegen*+2 格〉の場合とは異なり、Adelung 以前も以後も特に良し悪しの判断は下されていない。Schottelius (1641) が「前置詞 *wegen* は前にも後ろにも置かれる」(Schottelius 1641: 633)と発言して以降、Bellin (1660: 79)、Frisch (1741: 428)、Gottsched (1748: 429)、Adelung (1781: 349, 1782: 123, 1786: 110)、Heinsius (1825: 199)、Salzmann (1836: 163) が同様に「前にも後ろにも置かれる」と、価値判断なしで説明している。ただし、Hartung (1805) は、*wegen* は後置が

12) Campe (1810) は、*von wegen* について、「ベルリンの庶民の生活においては、何かについて語る機会を得る場合に」(Campe 1810: 611f)使われることがあると記述している。これは前置詞としての用法のことではなく、現代ドイツ語でも用いられる間投詞的な用法 *Von wegen!* のことを指していると思われる。「まさか」、「とんでもない」という意味である。

「ふつうである」(Hartung 1805: 180) と、Reinbeck (1821) は、wegen の後置は「例外である」(Reinbeck 1821: 263) とコメントしている。

4.3. 〈wegen+2 格〉に関する評価

wegen が前置される〈wegen+2 格〉の初出は、「散文コーパス 1520-1870」において 1576 年であった。文法書の中で単独の wegen の用例が初めて確認されるのは、筆者が調べた限り、Ritter (1616: 183) の wegen der Vrsach が最初である。〈wegen+2 格〉という異形に関する正誤の記述は、筆者が調べた文法書・辞書には見られないが、〈wegen+2 格〉については当然そうあるものとして例が示されている。そもそも、wegen の格支配については、次のように一貫して 2 格支配であるという記述がなされていた。

「2 格と共に。[...] Von seinetwegen (彼ゆえに) のように。」(Clajus 1578: 250)

「2 格と結ばれる前置詞は以下のものである [...] von wegen/ wegen [...] wegen deß Dinges (そのことゆえに) [...] von wegen deß Vaters (父ゆえに) のように。」(Schottelius 1641: 631f.)

「wegen 前置詞。3 格と [ママ]。¹³⁾ Von Gotteswegen (神ゆえに) [...] Des Rechtenwegen (法ゆえに)、Wegen des Sieges (勝利ゆえに) など。」(Stieler 1691: 2457)

「wegen (2 格支配の前置詞) 原因、理由を表す。」(Steinbach 1734: 955)

「特に 2 格をとるもの。Wegen [...] von wegen [...]」(Bödiker/ Wippel 1746: 491f.)

「2 格と結ばれるのは、anstatt あるいは単なる statt、während、wegen。」(Adelung 1781: 347)

「Wegen、常に名詞の 2 番目の格、すなわち属格と結ぶ前置詞。」(Adelung 1786: 110)

19 世紀にも同様の記述がみられる。例えば、Pölitz (1804: 359)、Hartung (1805: 179)、Wismayr (1805: 93f.)、Lilgenau (1807: 46)、Reinbeck (1821: 89)、Heinsius

13) Stieler (1691) では wegen を 2 格と結ぶ例しか挙げられていないことから、“cum Dativ” 「3 格と」という記述は誤記と考えるべきであろう。

(1825: 14)、Götzing(1830: 133)、Heinsius(1830: 699)、Rumpf (1831: 145)、Salzmann (1836: 163)、Lhomond(1837: 65)、Roth(1837: 65)、Zeheter(1837: 102)、Zeidler(1847: 27)、Berthelt (1854: 90)、Weiss (1854: 232)、Kehr (1867: 192)、Götzing (1870:144) がそうである。

4.4. 〈wegen+3 格〉に関する評価

「散文コーパス 1520-1870」において 16 世紀後半に出現した〈wegen+3 格〉は、すでに 2.4 で述べたように、大きな変化を二度経験することになった。一度目の変化は 18 世紀における急増、そして二度目の変化は 19 世紀に入ってから急減である。von 付きの wegen から主要形の座を奪った〈wegen+2 格〉が勢いを増していた 17 世紀には頻度がせいぜい 5%に過ぎなかった〈wegen+3 格〉が、18 世紀に入って一気に勢いを増した。しかし、19 世紀になった途端、〈wegen+3 格〉はその数を一気に減少させたわけである。このような劇的な変化を見せるのが〈wegen+3 格〉という異形である。これはどういうことなのであろうか。

文法書を見てみると、〈wegen+3 格〉がすでに頻度が高くなっていた 18 世紀中葉にあって、Gottsched (1748: 325) と Aichinger (1754: 460) は「wegen は 2 格支配である」という記述しか行っておらず、wegen が 3 格を支配する可能性については触れていない。¹⁴⁾

「wegen は meines Vortheils wegen (私の長所ゆえに) のように、2 格をとる」
(Gottsched 1748: 325)

「2 格を取るのは [...] wegen である、例えば wegen des Redens der Leute (人々の

14) 17 世紀の Gueintz (1641) は、「aus, außer, bey, mit, nach, nahe, ob, von, vor, wegen, zu は、奪格 (Nemendung) を取る」(Gueintz 1641: 92) と記述している。ここで言われている「奪格」とは与格 (3 格) のことである。(17 世紀のたいていのドイツ語文法家は、ラテン語文法の影響を受けて、ドイツ語に、主格、属格、与格、対格、奪格、呼格という 6 つの格を想定した。しかし、実際には奪格という格はドイツ語には存在せず、von dem Manne のような語形のこと指していた。したがって、この時代にドイツ語について言われた奪格とは、実際には与格のことである。これについては、Barbarić 1981: 632f. を参照。) しかし、Gueintz (1641) には、wegen が 3 格と用いられる例はまったく挙げられておらず、また別の箇所には「halben と wegen という前置詞は 2 格を取る」(Gueintz 1641: 109) と明確に書かれていることから、wegen が 3 格支配であるというのは誤記であると見なすべきであろう。

話ゆえに) など」(Aichinger 1754: 460)

〈wegen+3 格〉が誤りであると否定的な評価を述べたのは、18 世紀後半の Heynatz (1777: 245)¹⁵⁾が最初である。

「anstatt, längst, während, wegen を 2 格の代わりに 3 格と置くのは、正しくない。」
(Heynatz 1777: 245)

その 4 年後に Adelung も『ドイツ語文法』(1781)の中で「wegen seinem Fleiße のように 3 格と結ぶのは、標準ドイツ語では誤りである」(Adelung 1781: 349)と明言した。¹⁶⁾〈wegen+3 格〉に誤りという烙印を最初に押したのは Heynatz (1777) であるが、(このあと述べる)後世への影響力という観点から、Adelung に注目してみる。Adelung は、『高地ドイツ語の完全なる文法的・批判的辞書の試み』(Adelung 1786: 123)¹⁷⁾でさらに、「上部ドイツでこの前置詞が好んで 3 格と結ばれるのは誤りである」と、「上部ドイツで」ということばを追加している。これらの Adelung の言説以降、さまざまな文法家が wegen の 3 格支配に対して否定的な価値づけを行うこととなる。筆者が調べた 40 冊のうち 8 冊の文法書・辞書において、〈wegen+ 3 格〉は正しくない、あるいは上部ドイツの方言であるという価値判断が下されている。時代順に挙げると、次の通りである。

「unweit, wegen を 3 格と結ぶのは誤りである」(Adelung 1800: 140)

「wegen を 3 格と用いるのは、南ドイツに非常によくある間違いで、バイエルンでは語学教師でさえ、この間違いを犯してしまう。例えば Wegen dem Durchzug der

15) Heynatz (1777) は、*Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen* の第 3 版である。この文法書の第 1 版 (Heynatz 1770) では、wegen の 3 格支配についてはまだ全く言及されていない。

16) Adelung は、翌年の *Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache* (1782: 123) でも同様の発言をしている。

17) この 5 巻からなる *Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuches der Hochdeutschen Mundart* (1774/ 1775/ 1777/ 1780/ 1786) の第 2 版となる、4 巻本の *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart* (1793/ 1796/ 1798/ 1801) においても、Adelung は wegen に関して第 1 版とまったく同じ記述を行っている (Adelung 1801: 1428)。

Truppen (軍隊の通過のために) のように。」(Siebenkees 1808: 111)

「正しくないのは、上部ドイツで見られるように、*wegen* を 3 格と用いることである。」(Campe 1810: 612)

「*wegen* の後にけっして 3 格を置いてはならない。」(Adelung/ Schade 1824: 539)

「上部ドイツの統語法によれば、*wegen* は 3 格と結ばれることがある (がそれは正しくない)。」(Brentano 1870: 63f.)

Siebenkees (1808) は、*wegen ihren Bettel hat man die Bettelmönche aufgehoben* (物乞い故に、それらの托鉢僧たちは逮捕された) という例を示して、*wegen* の 4 格支配のことに触れ、*wegen* の 4 格支配¹⁸⁾は 3 格支配と「同じく誤りである」(Siebenkees 1808: 111) としている。

4.5. 文法家の影響の可能性

以上見てきたように、〈*wegen*+3 格〉に対して文法家によって「誤り」という烙印が押されたのは、18 世紀後半 (Heynatz 1777、Adelung 1781) においてであった。このあと 19 世紀に入ってから、「散文コーパス 1520-1870」において〈*wegen*+3 格〉が急激に減少している。この烙印と急減とは、なんらかの関連性があるのであろうか。19 世紀に入ってから、Campe (1810) や Heinsius (1825) などの多くの文法家が〈*wegen*+3 格〉を誤りと評価したが、これらのメタ言語言説が *wegen* の使用実態になんらかの影響を与えたと考えすることはできないであろうか。その場合は、文法家による影響が言語変化のメカニズムとして働いた事例であると言える。

19 世紀は、ヨーロッパで学校教育が広く行われるようになった時代である。前述の文法書 Adelung (1781) は、プロイセンの委託を受けて学校教育のために書かれた『プロイセン王国の学校での使用のためのドイツ語文法』である。言語計画に関する研究で知られる Haugen によれば、この 19 世紀には「多くの集団が、支配的な標準をよく知らないために公的生活から排除されて、二流の市民になっ

18) Trübner の辞書にも、*wegen* が 4 格と結ぶ例が挙げられている：Wegen ein bißchen Kopfweh gehe man doch nicht gleich zu Bett (少しばかり頭痛がするからと言って、すぐに就寝するものではない) (Trübner 1957: 68)。ちなみに Paul (2002) は、*wegen* を 4 格と用いるのはベルリン方言であるとしている (Paul 2002: 1151)。

ていることに気づき始め」(Haugen 1966: 12)、教育を受ける機会を得た一般大衆は、それまで教養層に独占されていた標準語を獲得しようと努めた結果、標準語が定着したという時代背景がある。また、Bahner/ Neumann (1985)によれば、「18世紀末に近づくと、母語教育は(国民文学というものを背景にして)統一的なドイツ文章語を仲介する課題を持つようになった。そのために文法規範が確立される必要があった」(Bahner/ Neumann 1985: 252)。そして、「教師たちは Adelong の決めた標準に従い、(中略)それを授業に取り入れ」(ebd.: 252)、「1830年頃までは、その規範文法が文法教育において支配的であった」(ebd.: 253)。つまり、「wegen は2格と結ぶのが正しく、3格は誤りである」とした文法家 Adelong の規範的発言(1781年)によって、前置詞の格支配に関する正誤の問題が書き手に意識化され、そのことが「散文コーパス 1520-1870」で観察された19世紀における〈wegen+3格〉の激減につながったという解釈が可能ではないだろうか。

Grimm (1819)は『ドイツ語文法』(1819)の序文で、Adelongをはじめとするそれまでの文法家について、「言いようのないほどに小事にこだわって」(Grimm 1819: IX)いて、「文法家の作る抽象的で力がなく誤った規則によって[言語は]成長が先導されたり促進されたり」(ebd.: X)することはないとしている。しかし、本論文で示唆されるように、文法家が特定の表現に対して下す評価が言語の変化に影響を与えることはあり得る。Grimm (1819)はまた、それまでのドイツ語文典を、「まやかして過ち(Täuschung und Irrthum)」(ebd.: X)であり、「硬直的な(steif)」(ebd.: XIV)のものであると非難している。しかし、このGrimm (1819)による批判は、Adelong については必ずしも当てはまらない。例えば、Adelong (1798)は、本論文では考察の対象としなかった wegen と人称代名詞との結合について、次のように述べている。「上部ドイツでは、wegen ihrer のような形が用いられるが、これらは親密な話し方にむしろふさわしい。洗練された書き方ではその代わりに meinetwegen のような形が用いられる」(Adelong 1798: 1428f)。このように Adelong (1798)は正誤の規範的な二分法ではなく、記述的で語用論的な視点も持ち合わせていた。Adelong が wegen は2格と結ぶのが正しいという規則を示したのは、標準文章語の形成がイギリスやフランス等と比べて大きく遅れをとったドイツにおいて、標準文章語の確立のために言語規範を一本化することが要請された18世紀末という時代性があったからだと言うべきであろう。

5. 言語変化に関わる言語意識

以上、前置詞 wegen の歴史的変遷を見てきたが、ここで冒頭の疑問、すなわち「〈wegen+3格〉は現代ドイツ語にのみ見られる現象なのか?」、「〈wegen+3格〉は、いつ、どのように出現し、増減したのか?」という問いに答えておかねばならない。「散文コーパス 1520-1870」の分析結果によれば、〈wegen+3格〉は現代ドイツ語にのみ見られる異形ではなく、16世紀後半から存在している。〈wegen+3格〉が「どのように」現れ、増減を見せたのかという問いに対しては、本論文は、意味論的・統語論的な言語意識と社会言語学的な言語意識とを導き出したことになる。

意味論的・統語論的な言語意識は、文法化 (Grammatikalisierung) に関わる。wegen が本来の名詞としての意味を希薄化させ、von が脱落して wegen が単独で名詞の前に置かれることによって、書き手は wegen を前置詞として明確に意識し、まさにその前置詞化したという意識によって、書き手は wegen が支配する格として、3格、4格という選択肢をもつようになった。社会言語学的な言語意識は、文法家 (Grammatiker) に関わり、大きな枠では言語計画に関わる。文法家の指定した言語規範が学校で教えられることにより、書き手は正しいとされた 〈wegen+2格〉を選択した結果、文章語においては (!) 〈wegen+3格〉が激減した。言語変化の要因はさまざまにあり得るが、wegen の異形選択に関しては、とりわけこの2つの言語意識が、各歴史的段階の異形の競合状態、つまり複数の異形がなすモザイク模様を決める要因となっていたとすることができるであろう。

参考文献

□一次文献（出版年順）

- Clajus, Johannes (1578): *Grammatica Germanicae linguae*. Leipzig.
- Ritter, Stephanus (1616): *Grammatica germanica nova*. Marburg.
- Gueintz, Christian (1641): *Deutscher Sprachlehre Entwurf*. Köthen.
- Schottelius, Justus Georg (1641): *Teutsche Sprachkunst*. Braunschweig.
- Bellin, M. Johann (1660): *Syntaxis praepositionum Teutonicarum*. Lübeck.
- Stieler, Kaspar (1691): *Der Teutschen Sprache Stammbaum und Fortwachs*. Nürnberg.
- Steinbach, Christoph Ernst (1734): *Vollständiges deutsches Wörter-Buch*. Breßlau.
- Frisch, Johann (1741): *Deutsch-Lateinisches Wörterbuch*. Berlin.
- Bödiker, Johann/ Wippel, Johann Jacob (1746): *Grundsätze der teutschen Sprache*. Berlin.
- Gottsched, Johann Christoph (1748): *Grundlegung einer deutschen Sprachkunst*. Leipzig.
- Aichinger, Karl Friedrich (1754): *Versuch einer teutschen Sprachlehre*. Frankfurt Frankfurt/ Leipzig.
- Heynatz, Johann Friedrich (1770): *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen*. 1. Aufl. Berlin.
- Adelung, Johann Christoph (1774/1775/1777/1780/1786): *Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuches der Hochdeutschen Mundart*. 5 Bände. Leipzig.
- Heynatz, Johann Friedrich (1777): *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen*. 3. Aufl. Berlin.
- Adelung, Johann Christoph (1781): *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der Schulen in den Königlich Preussischen Landen*. Berlin.
- Adelung, Johann Christoph (1782): *Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache* Band 2. Leipzig.
- Adelung, Johann Christoph (1793/1796/1798/1801): *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart*. 4 Teile. Leipzig.
- Adelung, Johann Christoph (1800): *Auszug aus der Deutschen Sprachlehre für Schulen*. 3. Aufl. Berlin.

- Pölit, Karl Heinrich Ludwig (1804): *Allgemeine deutsche Sprachkunde*. Leipzig.
- Hartung, August (1805): *Deutsche Sprachlehre für höhere Bürgerschulen und für den Selbstunterricht*. Berlin.
- Wismayr, Joseph (1805): *Kleine deutsche Sprachlehre zum Gebrauche in Schulen*. München.
- Lilgenau, Andreas C. von (1807): *Anfangsgründe der deutschen Sprachlehre*. Augsburg.
- Siebenkees, Johann Christian (1808): *Über das Hauptgesetz der Teutschen Rechtschreibung, und über Sprachfehler Baierscher Schriftsteller*. Nürnberg.
- Campe, Joachim Heinrich (1810): *Wörterbuch der Deutschen Sprache*, Band 5. Braunschweig.
- Reinbeck, Georg (1821): *Regellehre der deutschen Sprache*. Essen.
- Adelung, Johann Christoph/ Schade, Karl Benjamin (1824): *Kleines deutsches Wörterbuch*. Leipzig.
- Heinsius, Theodor (1825): *Der Deutsche Rathgeber*. Berlin.
- Götzinger, Max Wilhelm (1830): *Deutsche Sprachlehre für Schulen*. Aarau.
- Heinsius, Theodor (1830): *Vollständiges Wörterbuch der deutschen Sprache*, 4. Band. Wien.
- Rumpf, Johann Daniel Friedrich (1831): *Der deutsche Secretär*. Berlin.
- Salzmann, W.F. (1836): *Alphabetisches Hülfswörterbuch*. Kitzingen.
- Lhomond, Charles-François (1837): *Anleitung zur gründlichen Erlernung der deutschen Sprache*. Bamberg.
- Roth, Karl (1837): *Anleitung zur gründlichen Erlernung der deutschen Sprache*. Bamberg.
- Zeheter, Matthäus (1837): *Anleitung zur methodischen Behandlung des Unterrichtes in der deutschen Sprache für deutsche Schulen*. Regensburg.
- Zeidler, J.M. (1847): *Das Wissenswertheste aus der Sprachlehre*. Neustadt a.d.H.
- Berthelt, August (1854): *Praktische anweisung zum deutschen sprachunterrichte in dem mittleren und unteren klassen einer volksschule*. Leipzig.
- Weiss Ch. F. (1854): *Taschenwörterbuch der gleich- u. ähnlich lautenden, in der Rechtschreibung aber sich unterscheidenden Wörter der deutschen einen Schriftsprache*. Nürnberg.

Kehr, Karl (1867): *Theoretisch-praktische Anweisung zur Behandlung deutscher Lese-stücke*. Gotha.

Brentano, Heinrich (1870): *Deutsche Grammatik und Stilübungen, zunächst für Gewerb- und Realschulen: In 3 Kursen*. Nürnberg.

Götzinger, Max Wilhelm/ Götzinger, Ernst (1870): *Anfangsgründe der deutschen Sprachlehre in Regeln und Aufgabe*. Leipzig.

□ 二次文献

Bahner, Werner/ Neumann, Werner (1985) *Sprachwissenschaftliche Germanistik. Ihre Herausbildung und Begründung*. Berlin.

Barbarić, Stjepan (1981): *Zur grammatischen Terminologie von Justus Georg Schottelius und Kaspar Stieler. Mit Ausblick auf die Ergebnisse bei ihren Vorgängern*. Bern/ Frankfurt a. M./ Las Vegas:

Dal, Ingerid (2014): *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*, 4. Auflage. Neu bearbeitet von Hans-Werner Eroms. Tübingen.

Di Meola, Claudio (2000): *Die Grammatikalisierung deutscher Präpositionen*. Tübingen.

Duden (2009): *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8. überarb. Aufl. Mannheim u.a.

Eisenberg, Peter (1994): *Grundriß der deutschen Grammatik*. 3. überarb. Aufl. Stuttgart.

Elspaß, Stephan (i. Dr.): Grammatischer Wandel im (Mittel-)Neuhochdeutschen – von oben und von unten. Perspektiven einer Historischen Soziolinguistik des Deutschen. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik* 43.

Götze, Alfred (1957): *Trübners Deutsches Wörterbuch*, Band 8, W-Z. Berlin.

Grimm, Jacob (1819[1968]): *Vorreden zur Deutschen Grammatik von 1819 und 1822*. Mit einem Vorwort zum Neudruck von Hugo Steger. Darmstadt 1968.

Grimm, Jacob/ Grimm, Wilhelm (1922): *Deutsches Wörterbuch*. Bd.13. *W-WEGZWITSCHERN*. Bearbeitet von Dr. Karl von Bahder unter Mitwirkung von Dr. Hermann Sichel. Leipzig.

Haugen, Einar (1966) *Language planning and language conflict. The case of modern Norwegian*. Cambridge.

- Hentschel, Elke/ Weydt, Harald (2013): *Handbuch der deutschen Grammatik*. 4., vollständig überarbeitete Aufl. Berlin.
- Mattheier, Klaus J. (1995): Sprachgeschichte des Deutschen: Desiderate und Perspektiven. In: Gardt, Andreas/ Mattheier, Klaus J./ Reichmann, Oskar (Hrsg.): *Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen. Gegenstände, Methoden, Theorien*. Tübingen, 1–18.
- Milroy, James (1992): *Linguistic Variation and Change. On the Historical Sociolinguistics of English*. Oxford.
- Nevalainen, Terttu/ Raumolin-Brunberg, Helena (2003): *Historical Sociolinguistics: Language Change in Tudor and Stuart England*. London.
- Paul, Hermann (2002): *Deutsches Wörterbuch: Bedeutungsgeschichte und Aufbau Unseres Wortschatzes*. Hrsg. von Helmut Henne, Heidrun Kämper- Jensen, Georg Objartel, Tübingen.
- Rayson, Paul (2014): Log-likelihood calculator.
<http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html> (07.11.2014).
- Scharloth, Joachim (2005): *Sprachnormen und Mentalitäten. Sprachbewusstseinsgeschichte in Deutschland um Zeitraum von 1766 und 1785*. Tübingen.
- Sick, Bastian (2004): *Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod. Ein Wegweiser durch den Irrgarten der deutschen Sprache*. Folge 1. Köln.
- Szczepaniak, Renata (2009): *Grammatikalisierung im Deutschen. Eine Einführung*. Tübingen.
- Takada, Hiroyuki (1998): *Grammatik und Sprachwirklichkeit von 1640 bis 1700. Zur Rolle deutscher Grammatik im schriftsprachlichen Ausgleichsprozess*. Tübingen.
- Weinreich, Uriel/ William Labov/ Marvin I. Herzog (1968): Empirical foundations for a theory of language change. In: *Directions in Historical Linguistics: A Symposium*. Edited by W. P. Lehmann/ Yakov Malkiel. Austin, 97-195. (ワインライク U./ラボヴ W./ハーゾグ M.(1982)『言語史要理』山口秀夫編訳・補説、大修館書店。)
- 高田博行 (2009a) 「歴史社会言語学の拓く地平—一人の姿が見える言語変化」、『月刊言語』(大修館書店) 特集：ことばの変化を捉える—言語研究における通時的視点、2009年2月号、34-41頁。

高田博行 (2009b) 「言語意識史から見た枠構造—17・18 世紀の文法家による評価をめぐって」、『ドイツ文学』(日本独文学会編) 第 140 号、25-40 頁。

ヘンツェル、エルケ/ ヴァイト、ハラルト (1994) 『ハンドブック現代ドイツ文法の解説』(西本美彦、高田博行、河崎靖訳)、同学社。

細川裕史 (2009) 「社会語用論的語史研究とはなにか?—社会コミュニケーションとしての語史に関する一考察」、学習院大学ドイツ文学会『研究論集』第 13 号、67-94 頁。

□ 「散文コーパス 1520-1870」より、本論文で参照した書籍 (出版年順)
Mensing, Johannes/ Fritzhans, Johannes (1527): *Leuterunge*. Leipzig.

[Anonym] (1528): *Des Durchleuchtigiste[n] Grosmechtigisten fursten vn[d] her[r]n Herrn Ferdinanden*. Wien.

Cicero, Marcus Tullius/ Schwarzenberg, Johann von/ Neuber, Johann (1537): *Officia*. Augsburg.

Mosheim, Ruprecht von (1542): *Microsynodvs Ratisbonen(sis) germanica*. Köln.

Veit, Dietrich (1546): *Summaria über die gantze Bibel*. 1. Nürnberg.

Laurentius, Surius/ Fabricius, Heinrich (1576): *Kurtze Chronick Unserer zeit*. Bd.3. Köln.

Heiden, Andreas (1598): *Wolgegründete widerlegung des Calvinischen Büchleins*. Wittenberg.

Hund, Wiguleus (1598): *Bayrisch Stammen-Buch*. Ingolstadt.

Pacificus (1719): *Sylva Spiritualis Morum*, Bd.1. Augsburg.

□ 「18 世紀ドイツ文学データベース」より、本論文で参照した書籍 (出版年順)

Löscher, Valentin Ernst (1705): *Historie Des Römischen Huren-Regiments*. Leipzig.

Bodmer, Johann Jakob (1722): *Die Discourse der Mahlern*, Band 2. Zürich.

Haller, Albrecht von (1732): *Versuch Schweizerischer Gedichten*. Bern.

Richter, Christoph Gottlieb (1740): *Die redende Thiere*, Band 3. Frankfurt/ Leipzig.

Gottsched, Johann Christoph (1751): *Das Neueste aus der anmuthigen Gelehrsamkeit*. Leipzig.

Brandes, Johann Christian (1790): *Sämtliche dramatische Schriften*, Band 1. Hamburg.

(さとう・めぐみ 学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程)

Die diachronische Entwicklung der Präposition *wegen* und das Sprachbewusstsein vom Sprachwandel

MEGUMI SATO

Die Sprache verändert sich, indem die Konstellationen von miteinander konkurrierenden Sprachvarianten sich durch verschiedenartige Faktoren verschieben, wobei Nebenformen im Gegensatz zu Hauptvarianten oft als fehlerhaft empfunden werden. Im Sinne der Formulierung von Milroy (1992: 169), „it is speakers, and not languages, that innovate“, ist davon auszugehen, dass der Sprachwandel die Veränderung der Auswahl aus verschiedenen Varianten durch Sprecher/ Schreiber darstellt. Dies bedeutet, dass das Sprachbewusstsein, das mit seiner Bewertungsskala die Selektion aus mehreren sprachlichen Formen regelt, bei der Beobachtung des Sprachwandels Berücksichtigung finden muss. Im Anschluss an Scharloth (2005:19) wird in der vorliegenden Arbeit unter *Sprachbewusstsein* „die Gesamtheit des metasprachlichen Wissens eines Individuums oder (hypostasierend) einer Gruppe“ verstanden. Zur Erklärung des Mechanismus der sprachlichen Veränderung gilt es deshalb, das Bewusstsein der verschiedenen Varianten zu untersuchen.

In der vorliegenden Arbeit soll versucht werden, den Prozess des Sprachwandels anhand der Entwicklung der Präposition *wegen* aus der Perspektive des Sprachbewusstseins zu erfassen. Die Rekonstruktion des Sprachbewusstseins soll dabei aus der Analyse der Geschichte sowohl des Sprachgebrauchs und Sprachsystems als auch der metasprachlich-bewertenden Aussagen über die Varianten erfolgen.

Die Präposition *wegen* gehört zu den sogenannten „neuen“ Präpositionen, die aus Nomen oder Verben stammen. Bei der Wahl des Kasus gibt es heute bekanntlich „Schwankungen“: Genitiv oder Dativ. Zur Erfassung der geschichtlichen Entwicklung des Sprachgebrauchs von *wegen* werden Daten von insgesamt 140 gedruckten Gebrauchstexten (außer literarischen Texten) in der Zeit von 1520 bis 1870 und das Korpus „*Deutsche Literatur des 18. Jahrhunderts Online*“ (de Gruyter) herangezogen. Als Er-

gebnis der Untersuchung lassen sich vor allem die folgenden Tendenzen feststellen:

- A) die Abnahme der Varianten *von* + Genitiv + *wegen* und *von wegen* + Genitiv seit Mitte des 17. Jahrhunderts
- B) das Auftreten der Variante *wegen* + Genitiv im letzten Viertel des 16. Jahrhunderts
- C) das Auftreten der Variante *wegen* + Dativ am Ende des 16. Jahrhunderts
- D) die Zunahme der Variante *wegen* + Genitiv im 17. Jahrhundert
- E) die Zunahme der Variante *wegen* + Dativ im 18. Jahrhundert und ihre plötzliche Abnahme nach 1800.

Als wichtigster Faktor für den Wandel des Wortes *wegen* kann **das semantisch-syntaktische Sprachbewusstsein** benannt werden; die „Desemantisierung“ des Substantivs *Wegen* (Plural Dativ von *Weg*) und die „Grammatikalisierung“ des Wortes *wegen* zum Status Präposition verursachen verschiedene Kasusreaktionen seitens der Sprecher (Schreiber).

Zur Rekonstruktion des Sprachbewusstseins mittels der metasprachlichen Aussagen werden in dieser Arbeit 40 Grammatiken und Wörterbücher evaluiert und direkte Bezüge zu der Präposition *wegen* gesammelt. In diesen Bewertungen wurden – wenn überhaupt – die Varianten mit *von* und mit *Dativ* stigmatisiert. In der Geschichte der metasprachlichen Aussagen über *wegen* ist der Ausspruch von Adelung (1781) „Es mit dem Dativ zu verbinden, wegen seinem Fleiße, ist im Hochdeutschen fehlerhaft.“ sozusagen als Wasserscheide zu verstehen. Die ungewöhnliche Veränderung, dass die Variante *wegen* + Dativ, die im 18. Jahrhundert stetig zugenommen hatte, nach der Jahrhundert-schwelle 1800 plötzlich abzunehmen begann, könnte sich auf das (indirekte) Einwirken des Grammatikers Adelung durch den Schulunterricht im 19. Jahrhundert zurückführen lassen. Man kann in diesem Zusammenhang vom **soziolinguistischen Sprachbewusstsein** für den Sprachwandel sprechen.

